

南葵文庫旧蔵万葉考の書入について

河野頼人

近世の万葉研究史の研究において、佐佐木信綱・久松潜一博士はじめ諸学者の説かれていますように、万葉集の書入本の研究はゆるがせに出来ないと思う。

賀茂真淵の万葉考の巻七以下は、万葉考巻七序（天明五年（1825）三月十九日）に狛諸成が真淵歿後残されていた草稿をもとに現存の形にまとめたといっているが、それによると諸成の見解も加わった増訂とみられると思うのである。そして現存の全集本の形のもは、右の序の後も増訂が加えられれば寛政五年（1793）の末ごろに成ったと考えているのであるが、そこに到るまでの諸成は、多くの人々の助力をうけてもいるのである（小稿「狛諸成の万葉考増訂を助けた人々」、『万葉学研究・近世』所収）。さてその過程をみていこうとする時、いろいろ諸成書入本の検討の積重ねが行われねばならないと思うのであるが、ここでは東京大学図書館蔵南葵文庫旧蔵万葉考の書入をみてみたい。

本書は二冊からなり帙に「万葉考^{増訂}」、「乾」の題簽に「万葉考^{一三本調}」とある。
^{四三五六}「乾」とある。

「乾」は考の巻四・三・五・六を書写したもの（本文は板本に同）

をこの順序に綴じ上欄に諸成の書入がある。この書入をみると、真淵の手によって完成している考巻六までについてもその注の本文の改訂を意図していたことが知られるのであるが、巻四の巻尾に、
「狛少兄大人の本をもて鳥か鳴吾孀の大城の本霞岡の邸中にて書うつし侍る也

寛政二年（1790）正月中旬 青柳種信写」

とあり、これにつづいて右とは異筆で、

「于時 文政六年（1823）十二月上旬 宮永峯安写」

とある。諸成の本を種信（後、種麿）が書写、それを更に転写したものであろう。猶この書入は文政七年（1824）の長瀬真幸の考巻三・六の出版には参照されていない。

そして「乾」の書入の時期であるが、種信は二十四歳の寛政元年（1789）己酉四月出府、諸成を訪ねている。校本万葉集に採られている竹柏園蔵考一本には、考巻六の終に板本にもある「明和五年（1788）十一月 尾張黒生」の跋と、

「安永七年（1778）五月 狛諸奈理写」

という奥書及び、

「ことし寛政のはじめの年（1789）しはすの日鳥か啼吾孀困なる

大城の本貫の邸中にて高麗宿禰大人躬らかき給へる本をもて書うつしぬ

大藏種信（花押）

の識語があり、又その巻四には先にあげた本書巻四の巻尾のものと同じの識語がある。諸成ははやく安永七年考六巻を書写していたのであるが、この書入の中に「本言を考得しハ諸成六十八歳におよびて也」といひ六十八歳は寛政元年である（享保七年（1783）生）。又「種信」の字で七例その説が引かれている。ほぼ寛政元年ころまでの書入であろう。

そして「坤」——考卷七・八・十一を合冊——の書入は「乾」にひきつづいてなされたものと思われる。

さて先にも述べた如く考卷七以下は寛政五年末ごろ成ったと考えるのであるが、種信の万葉研究は、右の竹柏園蔵考一本の巻八の終に「天明六年（1786）三月始而六月三日物離爾中書畢ぬ

毛呂成六十四齡

青柳種満

寛政五年七月中旬書亨之
（参）同年八月廿日書入畢

と、在府中つづけている。又筑波山に登ったことが本書書入にみえている。「坤」の書入は寛政五年ごろまでのものとみてよいと思う。墨の書入と朱の書入があるが、その時期を異にしているのである。又「坤」には「種万呂・種麻呂・種満」となっている。そしてこの書入が、例えば、考卷七の一八六〇に、

A南葵文庫旧蔵本文

ナカキケニ

長気爾人今本気の下爾を脱、氣と仮字なれハ爾を補へりV

B同右書入

「今思ふに此氣ハ約め言にかりたる処なれハ仮字とすへからすさらハ爾を補ずともあるべし」

C全集本文

長気爾人今本

長気爾人は来経の約にて長き月日も年経たるをいふ言ならんと

吾友大藏種信かいひしV

とあるが、謄添訓の原則によるAの真淵注にBの諸成の書入が加えられ、それがCとなつていつていると思うのであるが、書入が全集本万葉考に吸収されていく姿が指摘出来るのである。

さて「乾」の書入については既に小稿「狛諸成の『万葉考』増訂の方法をめぐって」（前掲書所収）に些かふれているので、ここでは「坤」の書入をかかげることにした。

書入について気付を少しあげておくと、考卷七・八にわたつて仙覚抄を「顕昭云」として書入れ、批判もしている。ここには増訂にあつたの注釈書に対する姿勢の一端をうかがうことが出来ると思う（小稿「狛諸成の『万葉考』述作と注釈書」、前掲書所収）。ただし二一九は仙覚抄は「アシヒキノヤマトツクルコ」。一三〇二の「顕注……千返と書て」は仙覚抄にはなく「千返告」である。「返」とする本はない。又、一八三九は「ユキケノ水ニ」、二二八一は「ヒタクルホトニ」、一一三六「菅藻」は「スカモ」と仙覚抄にあつて一致しない。二〇八九の「注」は仙覚抄である。

考卷十一に万葉集略解の訓と一致する書入が多い。

一八五九について、略解「梅花鴨」とし注に「梅は桜の字の誤なるべし」という。これは真淵もはやく「桜なるへし下桜を梅に誤」（金刀毘羅宮蔵真淵自筆書入本万葉集）といつている。それぞれ独自に考えられたものか。一六七三に「一云可レ用」というが全

集本は一云をとっていない。後に万葉集古義が「久流にては、てにをは調はず」として一云を本文にたてている。

猶、前掲「狛諸成の『万葉考』増訂の方法をめぐって」を参照していただけるならば幸いである。

翻刻

- (1) 上述の万葉考の坤の書入を翻刻したものである。
(2) 各条ごとに歌番号を付しておいた。

- (3) △印の下に万葉考を掲げ、書入は○印を用いて引いておいた。又、気付は()の中に示しておいた。

〔万葉考卷七〕(今卷十)

一八一三〇卷向山の事ハ冠辞考、兎等之手乎の条下に委見へたり

一八一六〇かぎろひのひをいの如く唱るハ言便也

一八一七〇種万呂頭注に朝妻山ハ近江国にありといへり

○頭注の説非なり

△朝妻は前の哥と同所也但高市郡なるへし○非也葛上郡朝妻村有り天武紀曰幸于朝嬪

一八一九〇打醒てふ哥の左に詠鳥と今本にあるをすてし事始にいふ如し下これにならひて見よ

一八二三〇貞ハ古貌字

一八二五〇仁徳紀十三年築横野堤

○純古今冬枯の横野の堤風さへて入汐遠し千鳥鳴なり(卷六冬 堤千鳥を 藤原光俊朝臣 但し「霜枯の」「入しほとほ

く」)

一八三二〇頭注別義なし

一八三四〇末の句ハ橘千蔭の考によれり

一八三九〇頭昭下の句を雪げミづにもとよめるハわろし又えぐとハ芦をいふ也といへるもあやまりなり

△惠具探跡○頭エグツムト

△裳裾所沾○モスソヌラセル

一八五六〇楊ハかづらにてふ事ハあれど挿頭ことは見へずよて吾ともかく論て訓を定め

一八五八〇頭昭ハうつたへとはひとへといふことゝる也といへり心ゆかす

一八五九〇此にははせも後世意にて香の事と見しよりいよ梅とは書しならん此にほひも桜花の色のでり合をよみしなるへし

一八六〇〇今思ふに此氣ハ約め言にかりたる処なれハ假字とすへからすさらハ爾を補すともあるべし

○頭昭長氣の氣ハなごりの心にあたりたるにやといへるハわろし

一八六七〇頭昭云安不山在所をしらずこれを尋べし佐宿木の花いまだこれをたづねえず因これをたづぬべしこれを尋ねんがために勘之注し越るところなりといへるハ古ハ草字なりしを考得ざる也

○頭昭人見無二とあやまる

一八六八〇馬酔をとして頭昭ハつツじの方に注せし也

一八七五〇頭云紀之許能ハ此哥古点にははるされハこがくれおほき云々と点せりといひて猶きのこのゝ方につきてくさくさいひたり

○頭紀之許能暮之とあるは

一八七八〇 聳ハ聞の古字

○末の句のたぎつせの音ハせのとよむへし

一八八〇〇 △念共〇オモフ

○念を今本に忘とあるハ誤也活本によりてあらたむ

一八八九〇 下心吉ハしづ心なしにて吉は無の誤

虫 しからハ下のうたての詞かなへりさて此哥譬喩にせるハいかと橋千蔭

ハいへり

○顕照云桃ハ花のみあまた咲てミなる事ハ乏き物にせり志かる

をけもといへハ実になれる名をあらハ寸也これをたまさかに思ふ事をとげてミなるにたとふといへるハよし

△吾屋前之〇顕ヤドノ

△今本につきよさしと訓は〇顕

一八九七〇 もずの草ぐき顕昭先達の説とてまことも聞へぬ説をあげ

て先達の説也あふぎて信すべしといへともい万哥の心を見る

にくきとハくゞると云ことば也爲の哥にも有といへるハ顕昭

の先達に勝れたるなり

一九〇五〇 顕昭云さく野ハ所の名聞たり在所これを考るへしといへ

るハさきをさくといひしより地名を考へざる也大和添下郡狹

城種列陵あり式に同郡に佐紀神社あり又集中春日在三笠の山

丹月母出奴可母佐貴山爾開者桜之花可見(一八八七 但し板

本に丹は「爾」、佐貴山は「佐紀山」、開者は「開有」、「花」

の下に「乃」あり)ともありミな同地なるをや

△卷十三に女郎花咲生花かつみ(六七五)〇サク顕

一九一一〇 卷五の哥如何知兼(三〇三三)とあるを今本になにと

訓るハ如字 虫 れりよしハそこにいふ

一九一九〇 顕昭も司馬をしめとよめる古点をしりぞけてしばのかた

に付たり

一九二七〇 顕昭神備而神さびの略のよしいひしハ脱字心付さるにや

又社にさか木をいつくハ古の常なるを此布留の杣につきてあ

らぬ説をあげたり此古説も上のもずの草ぐきと同じきあとな

しはなしなり

一九二九〇 顕昭さの云々ハ藤の一名也云々おほかた藤斗にハあらす

花ハ多くさけどもミなることのすくなきものをバいふべしと

いへるハ何によれるにや

一九三〇〇 顕昭云古点には梓弓ひきつべにある云々と点せり浜成卿

哥式に云々此哥を引て阿豆佐由美 一句 比岐都能倍那留云々よ

し久引津とハ井の名也津とハ水也つるべをもちて引あぐる水

なればひきつといふ云々此説わらふにたへたり又井の辺の海

藻の花さくハ久しきにたとふ云々此哥深秘などハいふにもた

らず井の辺に海藻ありて水にうるほひて花さくへきかハなど

地名をはかゞなへざる

△引津辺有〇ヒキツノベ

一九三七〇 △答響万田〇コタユルマデ

一九四四〇 今本に叫とあるハ叫の誤也叫吉 切鬮去声呼也

一九六一〇 契沖ハ竿にかけてほしたる衣の袖を云歎されと君にきせ

よとわれをしらする心得がたしといへり今本誤字多を考得さ

る故也

二〇〇三〇 顕云二の句古点にははへる伊もハと有と云々有抄にい

は枕とハいしの枕をまくと云也こゝにいしとよめるハ誠の石

にハあらす玉也たなばたのあふ処にハ玉の枕有と見へたり本

文也といへり

二〇二〇シナカ鳥を水長鳥と書ると同じ

△五百都集乎〇イホツツドヒヲ

二〇二一〇顯昭云水かけ草とハ稻の名也といへりといへるハしひたるなり

二〇六五〇種麻呂田神代紀一書ナニ手玉玲瓏織紙之少女云々
二〇八九〇芒ハヤことなき御説にていとめでたければあけつ

〇□注に旗荒ハはつ嵐の事とてくさくの説をあげしハ誤字に心つかさる也いふにたらず又家持之我波多波吾等爾可伎無氣(四一九一)とよめる波多をはつほの事といへるもわらふべし波多ハ紀式其外も魚ハ鱈を虫

二〇九四〇字彙ニ此古字鐘鐘通とあり鐘ハ諸容反章鐘も諸良反章なりヨウノ反由なれはいつれもこをキに通して楽調にシキと唱ふるならんさらハ此集鐘鐘更へ書を改むへからずシキのキをクに通して鐘礼に借しものか

二二二一〇顯昭云二二の句古点には手もすまにうへしもしるくと点せりいさゝかかなはず其たぎそなへうへしなしく也たぎハあぐる也あげそなへといふことば也

二二一七〇顯云ゆきあひのわせとは稻の名也はやきわせ

二二三三〇荊婆可ハ卷十三 卷十一にもあり婆ハ言便の濁をしらせせて濁音の字を用ゆ

二二四二〇△斐登〇ツマヲマカント

二二六六〇烏石を取古と書て古点にはとるこの地とよむよしいひて顯昭ハとろしによりたり

二二八五〇神名式葛下郡大坂山神社葛城二上神社とあり崇神紀にも大坂と書たり

二二〇一〇顯昭も集中此哥のみ紅葉とかける也といへり

二二〇三〇顯昭三四句を高松野山司之第四句諸本おほむね野山同之と云し其に依に古点にはさことに箱ハおくらしたかまつのやま同じく云々といへり帥中納言伊房卿の手跡兩本ならびに長中納言の本には野山司之とかけり其理尤よし今和しかへてさともけにしもハおくらんたかまつとのやまつかさのいろづく見れハ野山つかさとは野山つづき也といへりつかさの説ハいまだし

二二〇六〇推古紀南淵坂田尼寺とあり大和高市郡なり

二二二一〇顯注奥儀抄にはとくとむすぶとゝかきて釈もとくとむすぶと立田山とは袴のこしハゆふとでもたちとくとでもたてバとくとむすぶとゝいふ也と釈せり此集の書やうハとくとむすびてとよまれたり紐のとけたれハむすぶとて立と聞へたる也
二二二九〇顯注あし引の山につくる田とありかななれハ不知本書いかにかけるか

二二三九〇種麻呂云古事記に秋山之下氷壯士とあると同じ事にて下髓の事にあらず考違り

二二五四〇是より第三句めの秋穂云々(二二五六)と第五句めの秋芽子之云々(二二五八)と是とみな三句と母に下の句は一言も違ふ事なく同じ言なり

二二六五〇顯注かひやの説さまゝなるよしいひて此のほとりの水の上に屋をつくりかけ魚に餌をあたへてあつめとる故に餌屋の義なるよしくさゝいへり

二三七〇思草顯昭ハ瞿表とも又茅ともいひて一ならず

二三七二〇顯注あへぬかにとハ背也といへり

二三七四〇顯昭展転をつてくともみて此哥の發句展伝と書る本あまた阿り其によりてつてく点せり傍例を考るに展転とかくべしこれハこひまろぶといふことばなりといへるハよし

二三八一〇顯注露草の説わろし

〇顯注日たくるまでと訓たり

〇種麻呂日下に朝開夕者消流鴨頭草云々(二二九一)ともよみたり日斜共といふと同じ

△日斜共〇ヒタクルマデニ

△可消所念〇ケヌヘクオモホユ

二三八三〇皮ありて生立るものハ皆しなへなひくもの也さて奈敵の約禰也此禰ハなにも通ふなれハしなへ竹しなへすすき也よりて皮の字をかりしならん

二三八八〇顯昭云可保花とはかきつはた也かほ鳥の鳴く時にさけはかほ花といふ

二三九〇〇萩は君にあらざる故に見れどもさびしといふ也君西不有者ハ萩か君にしあらねハ也

二三〇四〇顯昭ハ蜻蛉とてくさくいへり

二三〇八〇此二首問答にあらす此間に落たる哥のかなりん

二三〇九〇顯注ことなる事なし

二三一一〇顯注志めに恋ふをよせたり別の事なし

二三一七〇顯注ことふらバとハ委くふらバといふ也

二三三〇〇顯昭しづえを下枝といひなからほづえハこつえ也と後な

どいひつらん古歌は対にいへる社多けれどすえとてハ上枝下

枝にもいふべし

二三三一一〇神名式添下郡矢田坐久志玉比古神社三座

〇顯昭ハやたの野あらち山ともに越前也とあれどこハ越の人の京にありてよめるが困守るなどの帰りて後思ひ出たるかこそ聞ゆれさらは八田の野は添下郡にあるをよしとすべし哥の姿もなら人めきたり

神名式添下郡矢田坐久志玉比古神社和名抄同郡矢田郷あり

△今本にいろづく訓と〇顯同し

二三三八〇此哥考もとより真淵考によれり此哥誤字多有へし考るによしなしと真淵いへり

二三四一一〇顯昭ゆふの山を豊前いへるハ誤なり下の風土記にてしれ

〔万葉考卷八 (今卷七)〕

一〇六九〇者ハ音砂也志也を約れハ左となれハ左の仮字にかれり

一〇九一〇凡字音を仮字に用しハ音の頭の仮字を用ひ訓ハ下の字を用るハ例也たとへハ信ハ信の仮字とし共ハ毛の仮字とするが

如し

〇(朱書、以下朱という)顯昭わぎといふにくさくいひたれとよしなしこハワガイモコのガイの約ギなれハわぎもことハいふ也それをわきともわくともわがともかけりいつれも同内相通なれハともかくもいふなるへしといへるハワギ・モの哥をいかにとらんとするや

一一二四〇(朱)顯注五代集の哥枕には肥後の国也といへり

一一三四〇(朱)種万呂按に石迹ハ石門相等ハ磐石門ならん等ハ言

ばとハきこえず上同じく門にて意を重ねたるべし

一一三六〇(朱) 顕昭菅藻をスガゴモとよめるハいかたゞ菅もと

字のまゝにこそよむべけれ又云すがこもとハすけにゝたる河

藻也人のくふ物といへり

一一三七〇(朱) 顕昭云うちひとのたとへのあしるとハひをまつを

いふこゝろによそへたりひをまつわれなれハ人なあつまり来

りを静にてあらんとよそへよめる也

〇(朱) 顕昭云四の句をいまはさみをとよみしは何ともなし字

も今本とは異也けるならん

一一三九〇(朱) 顕注宇治ハ鹿のかよふ故千早人とは道はやき人な

といへるはわるふべきの甚しき説とも也

一一四〇〇(朱) 志ながとり非なの、顕注云先達の積さまゝ也或

人のいはく白き鹿をとりて猪のなかりけれハ志ながとりぬな

のと云といへりある人のいはく狩衣は志りのながき物なるを

居る時にはとりてゐればしながとりぬなのといふといへり

云々日本武尊の科野坂にもミをしの藤を白鹿の目にはしきか

け給ひしよりいふ故にしらかとりといふべしと範兼卿ハ釈し

て寄をも志らかとりと書り然れば昔よりいひ伝へたるがごと

くしながどりとといふべしなどつゞくる事ハしながどりととは

ますらをゝいへはますらをは伴類多く引つれたる物なれハ井

なとつゞくる也井などハハ男をいふ云々大かた此集のこゝ

る志長鳥とは獵者をいひ漁者をバいさなとりとよめる也此

説くゝいづれも附会の甚しき也信用にたらず

一一四二〇こハ津の國の垂水なるへし
一一四五〇陳奴ハ紀に血沼とある同地也

一一六三〇(朱) 顕昭紀伊國といへるハ誤れり

一一七〇〇(朱) 顕昭もなみくら山近江也といへり

一一七一〇(朱) 高嶋も同じ

一一七二〇(朱) かとりの浦ハ顕昭も近江といへり

一一七三〇爾布ハ芳野郡丹生

一一七四〇常陸の鹿島也〇(朱) 顕同し

一一七六〇卷六になつそひくうなかみかたの與つすに舟をとゞめん

さよふけにけり(三三四八)

△上総國海上郡〇(朱) 顕同し

一一八七〇飽浦〇(朱) 顕もわかと訓たり

一一八九〇居名之湖爾〇(朱) 顕同し

一一二〇〇二玉之浦〇(朱) 顕同し

一一二二〇糸鹿乃山之〇(朱) 顕も紀伊とす

一一二六〇[卷十八]に珠洲乃安麻能於伎都美可未爾伊和多利豆(四

一〇一)と家持卿のよめるもまたく海神の意をとりて沖はふ

かみといふなれハこゝも其意なり

一一二四〇(朱) 顕昭紀伊とす

一一二六〇(朱) 顕昭近江とす

一一三〇〇(朱) 顕も筑前とす

一一三二〇(朱) 顕昭云風土記云塙珂畷之東側近有大江口名□塙珂

水門堤容大船焉從彼通島鳥旗澳名曰岫門云々水ぐきとかけ

はくきとは□りたる所也水のいりたる所なれば水くきと

云なりけり

△又たつみの風〇(朱) 顕照
△水城の上に〇(朱) 是とハ別也

一二四四〇(朱) 卷七にも木綿山雪とよめり

一二五四〇(或説に後世の哥に志賀の浦ハミるめもおひぬ浦とかやう
べかすきする海人なかりけり(出典未調査)とよめれハこゝ

の二首にかつきといへる事いかゞと論へりこハ古ハハたゞし
く後世ハ訛多きをしらぬ説也右の後世哥を論に万葉にかくよ
めるを見ばやとこそとわるべけれ

一二九六〇(朱) 顕昭あたらしくすれる衣いまぬへるまだらころも

一二九七〇(朱) 顕昭著丹穂哉

△衣 染 雖 欲コロモハツメテホシケレド
チナニハセ 顕コロモヲソメテホシケレド

一二九八〇(朱) 顕昭千名こハ麻の種まき苳などを始めて糸にな
し織ものにかくるなどの多くのことあるを千名に名をたつと
いひし也

一二九九〇(朱) 顕昭安治村已下いろく意をこめて説たるハ後
の哥ならは然らん此集の意にはかなはずなん

△今本十依とありて〇(朱) 顕

一三〇〇〇(朱) 顕イシノナカナル中在 不知をシラセドよみしはつたなく
こゝろ通らず

一三〇一〇(朱) 顕注海神の手纏持在を母のてはなさずもるにたと
ふといふハよし母の思をハ蒼海にたとふる故に海神といふな
ど書はうがてり

一三〇二〇(朱) 顕注千遍を千返と書てチカヘリとよめり告をもツ

ゲツとあり

△千遍告〇(朱) チカヘリツゲツ顕

一三〇三〇(朱) 所見不云を知 不云とあり

△海子雖告〇(朱) アマハツグトモ顕

△心不得〇(朱) シネネバ
コソロハエズハ顕

一三〇四〇(朱) 顕隱在 吾忘 木葉知良武かくてハ二三の句
つゞかず且草木無心といへとも哥の道には心なきものに心あ
らす事つねのならひなりなどいひて紀を引つれどもいつれ
もかなはずかくの如く思ひの深きを神又ハ草木などの志るら
んといふは多し草木の無心と□いふまでもなし

一三〇五〇(朱) 大和志云人国山ハ吉野郡人知村之上方に在といへ
り 顕注ハ紀伊国といへり

一三一〇〇(朱) 顕注はいとわろし

△日師時從〇(朱) イヒシトキヨリ顕

△欲服所念〇(朱) キマホシクオモホユ顕甚長し

一三二二〇(下着ハいまだ恋ふほどにたとへ上にきるハ妻とたのためて
あらはれたるにたとふよし 顕注にはいへり
オトナサム

△事將成鴨〇(朱) ナラン顕

一三二四〇(朱) 顕注こと事なし

一三二五〇(朱) 顕昭風土記の全文をあげされハ知かたかれと上代
の哥の体にあらずおぼつかなし

〇(朱) 顕昭云此哥如伊与国風土記者息長足姫命御哥也此御哥
ことに御なさけ深かるべし橋の鳥にしをれはとハはるかに離
れ居て物さびしく昔のいろかを恋るにたとふ川とをミとハ
きかよふへきとこゝろもなく頼むへきかたもなきに譬ふさら
でぬひしわが下衣とは思ひし心もかはらじとかたみの衣を恋
ぬへる意をあらハせり橋島者伊与国宇摩郡にあり

一三二六△片糸爾雖有將絶跡念也○(朱)アリトわろしタヘントオモヘヤ頭よし

一三二七○(朱) 頭注異事なし

一三二九○(朱) 頭昭石著玉とよみしハいつれもわろし二の句よりかけあハズ

○(朱) 頭莫吹行年をフカデコソと訓しもわろし

○(朱) 種麻呂案に行年をコソとよまんも由なし行ハ所の誤かさらはカゼナフキソ子とよまんか年をソとよまん事おぼつかなし

一三三二○(朱) 頭云古点にハ水なそこにしづむ白玉しかるを參議浜成卿歌経標式に引此哥云美那曾已弊一句旨都俱旨羅他麻云々又しづくしづむ同韻相通といへるハ少し違へリシヅクハ下著のタを略けりシヅムは下著マリのタを略きマリを約めて△といふなり其シタツクのクとシタヅキのキこそ同韻にて通へくとむの返にあらざ頭昭が哥をとく事甚疎也

○(朱) シヅクハ体言なれハ体言のクを用にはたらかすことなし下着マリのマリハ助辞也天を約てムともいふまたマリのリを略てマより麻行にはたらきてシヅマムシヅミシツムシヅメシヅモといふしかれハマリの約もムまた上のでのみにてもムは同音なれハムハひとしく約る也シヅクのクより通へるにあらず。シヅクのクならハシヅキシヅクシヅケンシヅコとこそいはめ

一三三二○(朱) 頭昭しまつハ嶋人也東人をあづまつといふがことしといへり意ハ同し

一三三四○(朱) 哥意こと事なし

△慇念而○(朱) 頭同じ

△結纂之○(朱) 頭昭豆之

一三三五○(朱) 頭注ハ違へり

△玉令泳流○(朱) オボレスル頭

一三三六○(朱) 頭注てるざつとハよきますらを也と哥意は同じよきますらをのみにてハわからず

一三三七○(朱) 哥意同じ

一三三八△事無者○コトナクハ

○(朱) 頭おとづれのなかりせばとよそふる也ト

○(朱) 事を恋に□なせりとときこゆ

△甚幾許○(朱) イトイカバカリカ頭

一三三九○(朱) 頭着絃而とありつるすぐるてふ言ハいかゞ哥意もたがへり又男を弓女弦にたとふといひしもかなはず

一三三三○(朱) 頭注意わろし

△弓束級○(朱) 頭同

一三三一○(朱) 頭昭意同じ

△同等不有爾○(朱) トモナラナクニ頭

一三三二○頭昭石と金との説と磐之根而説とをあげて磐之根によりしはよし

一三三四○(朱) 頭於凡爾

一三三五△思勝○(朱) オモヒアマリ頭わろし

△吾印結○(朱) ワガシメムスブ頭わろし

一三三七△今本字の儘にくさのと訓る○(朱) 頭

一三三八〇良由の約留にてするなといふなり

一三四四〇(朱) 顕真鳥ハ鶯也えびすハわしの羽をばまどりの羽と

云なり又真鳥ハ鶯のよしいへりこハかなハず

〇(朱) 顕云うなての森ハ美作の名所也

一三四六〇(朱) 顕をミなめしを女にたとふハいまだし真葛をこそ

女にはたとへつれ女を吾方によするをいふこと上のミちのく

のあたら真弓(一三二九) など其外あげてかぞへかたし

一三四七〇(朱) 顕浅茅を心の一すぢなるにたとふ

一三五一〇(朱) 顕同し

一三五三〇(朱) 雖不秀と母ハよくもなくともといへるハわろし守

乍將居を風俗を守りてあらんといへるもあたらすこハ上の南

淵の細川山に立榎ゆつかまくまで人にしらるな(一三三〇)

とよめると同じく□き女の年長るをまつにてこそあれかかる

意の哥かた〜に見ゆ

一三五五〇(朱) 顕ハ真木とは杉木といひ又ハ榎の事とすいづれも

かなハず真木の燻手を宮木に造りし事卷一藤原宮作の哥(五

〇)によめりしかれハ松木なる事しるし神代紀に素盞鳴尊の

檢可以為瑞□之材檢可以為顕見蒼生奥津垂戸將臥□具とあり

顕昭か楨といへるハ枝ときこゆれはいよゝかなハす大殿作り

に打まかせて真木といはゝ松木なる事ハ上の神代紀にて

一三五六〇(朱) 顕汝情動をながま□ゆめとあり□わからず意

もたらす

一三五七〇(朱) 顕義同し

一三六五〇(朱) 顕義同じ

一三六六〇(朱) 顕七瀬之淀とは押紙云とて七瀬のあひだ〜によ

どハありといへるハよし鳥の雌雄の□ぬを波不立目と

いふといひしは違へるか

△意有社〇(朱) コレバコソ顕

一三六七〇(朱) 顕は津の国とす

一三八四〇(朱) 顕ハいまだし

一三八五〇(朱) 顕弓削河原を大和也といへり

一三八六△奥將深〇(朱) オキハフカケン

一三八七〇(朱) 顕注もよしあり

一三八八△今本瀬とありていはそゝぐと訓たれど〇(朱) 顕

一三八九△又紀伊国とも〇(朱) 顕注

△過不勝者〇(朱) スギガテスルハ顯

一三九二〇(朱) 顕別事なし

△紀伊国在〇(朱) 顕同し

一三九三〇(朱) 顕昭云此歌第二句間々之浜辺乃句不審也聞の浜辺

敷豊前に聞浜あるが故也若又豊前豊後の間に聞浜と云所のあ

るにや糺明之後令一定敷

〇(朱) 紀にも聞物部大斧手ちふ人あるも豊前の企救郡の物部

也

△愛子地〇(朱) 種万呂考に真直道にてハ聞へず真砂子のサと

横にナに通ハせたるならんさてこゝハ四の句の意をたゝまむ

料のミ

一三九四〇(朱) 顕注別事なし

△入流磯之〇(朱) イリヌル顯

一三九八〇(朱) 頭注船乘爾乘西意とハゆかんと思ふさへたよりあらハとくいなんと思ふにたとふる也といへるハあたらす上に告といへると同じく女の許容かといふ也集中此意多し皆同じ義也

一四〇一〇(朱) 頭別事なし

一四〇二〇(朱) 頭注同じきながら少し心ゆかず

一四〇四△挽歌〇(朱) 頭注にひき哥と訓しもあたらす大字につきてよめる也

一四一二〇(朱) 頭注さき竹はわり竹也といへるハいまだし

一四一三〇頭注に垂尾を論せしはいふにもたらず

一四一七〇(朱) 頭昭ハ津の国といひたり

〔万葉考卷十一〕(今卷九)

一六六四△臥鹿之〇(朱) 鳴

△今夜者不鳴〇(朱) コヨヒ

一六六六△不干而〇(朱) カハカズテ

一六六九△鹽莫滿〇(朱) シホハナミチン

一六七〇〇(朱) ユラノサキ此下七ノ甘妹カタメ(一二二〇〇)

△撈出而我者〇(朱) コギデ、ワレハ

一六七二〇(朱) □ノ甘黒牛ノ海クレナキニホフ云々(二二一八)

□下卅二丁イニシヘニ妹トワガミシ黒玉ノクロウシカタラミレバサブシモ(一七九八)

△黒牛方〇(朱) クロウシガタ

一六七三〇(朱) コレハヲトメラガ袖フル山(二四一五)ノ類ノ云

カケ□テ風ハ序ニテ奈伎ノ浜カ奈伎ハ□名ナラン下ノ十二ウ倉无ノ浜(一七一〇)ト云□倉ハ序ニテ同ジク奈伎ノ浜カ第□二ノ卅六丁ニ鳴鳥(三一六四)トモアリ同所カ或云莫ハ早ノ誤ニテ風早ノ浜ナラン

〇(朱) 玉ノ緒上ニゾノヤ何ナケレハヨリクトイフベキヲクルトイヘルハタガヘリ一云可レ用

一六七四〇(朱) 上ハ序也イデタチノ

一六七五△藤白之〇(朱) 名草郡

一六七六△黄葉常敷〇(朱) 落

一六七七△聞往敷〇キコエモユクカ (朱) キコエユカンカ

△大我野之〇(朱) 家家我草ニテ誤オホヤノ

△竹葉茹敷〇(朱) 小サ、バ

一六七八△鹿取 應〇(朱) ナビカシ

一六七九〇(朱) 魚彦曰或云名草郡麻津売神社アリ和名云同郡津麻郷アリ此哥妻社トアリツマノモリトヨムベシ社ハ杜カ

△妻、社〇ツマノモリ

△妻依来西尼〇(朱) ツマヨシ

△妻常言長柄〇(朱) ツマト

一六八一△吾恋居者〇(朱) コフ君道丸

一六八二△夏冬往哉〇(朱) ケ

△扇不放〇(朱) ハナタスヤノ結

一六八三△吾頭刺可〇(朱) 君

一六八四△散過去鞆〇(朱) スゲユケドモ

一六八五〇(朱) 玉緒ニカモニツ重レリ不調

△散乱而在○(朱)チリマガヒタル

一六八六△乱邪良志○(朱)ミダレニ

一六八七△宿而往奈○(朱)ユカムナリ

一六八八△名木河○(朱)清濁未詳

一六八九○(朱)浜ヲ遠ザカレハ故郷カ恋シキ也

△著而撈尼○(朱)コガサ子

△杏人○(朱)京

一六九〇○(朱)宿今本タヒネ或云宿字上旅字脱カ

一六九三〇速

一六九四○(朱)十一ニタクヒレノシラハマナミ(二八二二・二八二三)

○(朱)細布ヲ略テ細と書六帖ニホソヒレト訓ハ誤(ほそひれの鷺坂山の白つつし我ににほはね妹にしめさむ 人丸)

△吾爾尼保波氏○(朱)尼

一六九九△伏見何田井爾○(朱)フシミガ

一七〇〇△響 苗○(朱)ナルナヘニ

△雁相鴨○(朱)亘

一七〇三△時者雖過○(朱)スギ子ド不ノ字ヲカゝヌ例アリ

一七〇七△秋者散來○(朱)ケリ

一七〇八○(朱)クヒ山トイフ山ヲ馬クヒトイヒカケタリ

△馬昨山自○(朱)ウマクヒ

一七〇九○(朱)或云此哥瀧テ見立タルカ

△巖者○(朱)ニハ

一七三二○契沖云美濃也

一七四〇○統紀和銅六年夏四月割丹波五郡始置丹後国云々余社毛丹後二属ス

○風土記には三日三夜といへり

一七五三○契沖云大伴卿は安万呂なるべし下にあるも同じ

○種満云言借石こハ入深の義か物をおほつかなむも其入深く

奥所をしらぬよりいふときこゆこも国の奥所の有限も落す

つはらに見ゆるといふならん

△言借石○いぶせきと同言也

一七五七○種満嘗て此地に遊びて此湖をも渡り筑波山にも登り見し

に此哥(下ナシ)

一七五九○種満考るに武烈紀に太子と影媛と哥垣に立て哥もて問答

歌するありしかれハ吾思ふ女ハ哥もて其心をつくれは女も亦

おのれかあふへく思ふ男には哥うたひて答しなれハ賀我比とは加介安比てふ意なるへし介安の約加なれは賀我比といひし

也其中の加を約るは言便のみ

一七七〇○純日本紀卷一大宝元年正月乙酉從四位上大神朝臣高市麻呂為長門守

一七八〇○種満云大伴卿ハ上に筑波山の哥の端詞に檢稅使と見ゆれ

ハ此哥も同じをりのなるべし

一七九五○考徳紀にも今本大綱

一八〇〇○卷二十知波夜布留賀美乃美佐賀爾云々(四四〇二)

一八〇七○下総国葛飾郡真間和名抄にも出たり

一八〇九○種万呂考るにこゝの誂も上の筑波山の我賀比と同じ意ならん

——北九州大学文学部助教